

半端者が創造神となる  
日 —Re:make—

リヴィ (Live)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

混沌の時代に生まれし子は、わずか4歳で現実を悟った。

血肉が散らばり、赤く染まった世界を変えようと少女は決意する。

少女は走り始めた――。

『誰も傷つくことの無い愛だけの世界』を作る為に。

※これは『半端者が創造神となる日』のリメイクです。リメイク前と異なる点が多々ありますが、ご了承ください。

感想を書いていただけると作者が発狂弾幕を放ちながら飛び回り投稿頻度が上がります。宜しければどうぞ。

# 目次

プロローグ リリスという名の少女

1

一話 歩み寄るべき人 | 8

二話 子供なりの平和な世界 | 17

三話 悪の否定 | 25

四話 潜むもの | 33



# プロローグ リリスという名の少女

時は中世後半。

現代では幻や御伽噺とされていた伝説が生きていた時代。生ける伝説の衰退期へと移り変わろうとしていた時代の分け目。

その時代は大きく揺れていた。現代のような平和……一人一人の個性や意思が尊重される様な優しい世界とは程遠いものだった。

武器を持ち、血で血を洗い、臓物が地を汚し、悲鳴と呻きが至る所で交差する混沌の時代。幻となった妖怪や幻獣が歩き回り、力がものを言う時代。

特に妖怪同士の争いは酷いものであった。妖怪は一人一人が強大な力を持つ強力な種であり、その力は人間の数十倍にも及ぶ。彼らの争いは強者と強者同士の戦い。故に弱者はその力に怯えて生きる。

能力、魔法……人智を超える妖怪の戦いは、人間から見れば天災のそれであった。

妖怪から見れば人は糧。食料や欲、権力を示す道具でしかなく、妖怪の前ではあまりにも非力な人間はその力怯えてますがままにされ、結果命を落とす。

力無き者は蹂躪され、力有る者のみが頂点に立つ。

その時代の実態は実にわかりやすく、醜く、惨たらしいものであった。

——彼女は、自分が何者であるかを自覚した日をしっかりと覚えていた。

見渡す限りの屍。血の気の引いた顔。血溜まり。死体に突き刺さる武器。粉碎された肉片。

これが現実なのだ、わずが4歳にして知った。人間はまだしも妖怪であっても幼すぎるその年齢で全てを悟ってしまった。

人間、同種族、幻獣、その他諸々の妖怪達の死体——。

「素晴らしい戦果だ。父の威光、目に焼き付けたか」

父の声など耳に入らない。ただ己の瞳に広がる地獄のような光景をただ見つめる。

靴越しに伝わる池の様に溜まった血の感覚。撒き散らされた内臓が靴を通り越して伝わる。その度にズキンと頭に激痛が走る。

——どうして死んでいる？

それは争いの犠牲だからだ。個々の私利私欲で罪のない人々が傷つき殺され、残された者たちは憎悪に焼かれて争いの種を撒き、そしてまた罪のない人々が傷つき。

気持ち悪い。醜い。惨い。

その様子はまだ理性ができて間もない4歳の子供が見る生易しいものではなかった。見渡す限りの死体の山は、彼女の心に深い傷を負わせるには充分すぎるものであつ

た。

「お前も妖怪ならば覚えておけ。これが戦いだ」

——これが戦い。

何も残らない最も無駄な行為。平和から最も遠い最悪の現象。

己が差別で苦しんできたことなどは比べ物にならない痛みが彼女を襲った。そしてその戦いという単語を、ゆつくりと脳に刻み込み噛み締めていく。

これが、戦い。これが、戦争。

怖い。苦しい。痛い。悲しい。憎い——

ありとあらゆる感情が彼女の頭に流れ込んでくる気がした。

「これを見て己が吸血鬼としての自覚を持つてもらいたいものだ。出来損ないとはいえ、貴様も我がスカレット家の娘なのだから」

自分が誇り高き父の娘なのであるという自覚などどうでもよかった。

生まれてまもなくして、一族の象徴たる力を示す翼がないというだけで虐げられてきた彼女に、自身が短い生で感じた喜怒哀楽とは異なる感情が渦巻く。

無意識に胸に手が添えられる。その感情を抑えようと必死に胸を強く抑えた。ここでその感情を解き放せば、自分が消えてしまふそうだから。

息が荒い。胸が痛い。身体が苦しくても、その光景をじつと見つめる。

何度瞳を開けてもそれは幻ではなく現実。ここで彼女は4歳にして己が地獄に生きているのだと自覚した。

だからこそ彼女は強く願った。渦巻く感情よりも強く願った。

——わたしが、かえる。

皆が、罪のない人々が安心して生きれるように……

どんな理由があろうとも、武力や争いで解決するこの世界を変えなければならないと、彼女は決意した。

それが、翼無き吸血鬼——リリス・スカーレットという少女の根幹となった。

彼女はその日、強い雨が降っていたことをよく覚えている。



「どうしてあんなことを……」

「あやつは吸血鬼……そして誇り高きスカーレット家の娘であることを自覚しておらん。だからあれを見せたのだ」

轟々と音を立て屋根が雨を弾く音が室内に響く。

聳え立つのは紅。中世における貴族の象徴とも言える大きな館は血のような赤い色に染まっている。雨に濡れてもなお落ちぬその色は、その館に住む者達の本性を表していた。



吸血鬼が住む館——紅魔館にて静かに声が響く。

その声の主がいる部屋もまた、赤色に染まっていた。

「だからって……まだあの子は4歳よ!?!それを隔離した上であんな光景を見せるなんて……！」

「翼がない半端者と言えどあいつも吸血鬼。少なくとも誇りと自覚だけはしてもらわねばならぬ」

「ッ……！」

怒号を発する人間の女性——サリーは、この館に住まう一族、スカーレットの長であるセラド・スカーレットに声を上げて反発する。

サリーはもはや限界に近かった。日に日に酷くなっていく娘への当たり……リリース・スカーレットへの虐待は生みの親としても見ていられる光景ではなかった。

初めは子孫を残すためだと言われ、子を産んだ。サリーも初めての子供だからか、大いに喜んでいた。だが父となったセラドはこう言い放った。

『翼がない半端者だ』と。

吸血鬼という種族の大きな特徴として、まず月下における絶対的不死性がある。夜の支配者と呼ばれる吸血鬼は夜にこそ真髄を発揮し、それが月が満ちる時であれば力は本来の2倍近くまで跳ね上がる。

反面、夜に特化した一族なため日光には弱い。むしろそれが弱点といえる。あとは聖者が残したとされる聖遺物などが有効だ。

だがリリスは、人間のサリーと吸血鬼のセラドの混血種であり、サリー側の血…人間の姿を強く受けた子。日光や聖遺物にも耐性を持ち、翼の発達は無いに等しく、それは吸血鬼として生きるのには致命的過ぎた。

吸血鬼における翼は、大きければ大きいほど魔力の量や力量、権力を示す象徴。それが無いということは吸血鬼として見なされない。

さらに吸血鬼は集団意識が強く、一度敵と認めたものは絶対に仲間としない。それは幼すぎるリリスにも当てはまることであつた。

セラドはリリスを幽閉する形で部屋に閉じこめ、強固な封印術を施した。恥晒しを出す訳には行かないと強く言つて。

そして今回の件。4歳という妖怪にしても幼すぎる年齢にして、リリスは現実というもの突きつけられたのだ。

醜い争いを。

戦いが織り成す人と妖怪の業を。

戦いが産む犠牲を。

戦いに渦巻く憎しみの連鎖を。

その時、リリスが何を思ったのかは知らない。けれども、一生消えることの無いトラウマを植え付けられたのは確かだとサリーは思っていた。

セラドはリリスのことを娘として見ていない。ただの出来損ないとしてしか見ていない。

しかし人間のサリーがセラドに敵うことはない。発言力もないサリーには愛する娘であるリリスを救う手がなかった。

サリーは自分が人間であることを酷く恨む。もし自分が人間ではなく吸血鬼ならば、リリスは半端者として扱われず、助けられたかもしれないという後悔の念がサリーを押し潰そうとしていた。

「だが、しばらくは様子を見る。能力の覚醒も有り得るからな」

「…わかったわ」

「しかし、もし能力の覚醒や成長が見られない場合は——わかっているな？」

「っ……………ええ…」

セラドはそう言うのとサリーの部屋を後にした。

声は静まり、沈黙が部屋を館を覆う。静寂の中、一人の母の涙が響いた——。

## 一話 歩み寄るべき人



【サリー】

「……」

静かだ。とても。

普通の家庭で見られる家族の様なそこにはない。あるのはただ、夫に奴隷のように扱われる私と、虫けらと貶される愛しく大切な娘。

本来響くはずの娘のはしやぎ様も、父の父性も——そして、私の愛の向け先も、そこにはない。

元々、夫のセラドは私のことをただの子孫を残すための道具としか思ってなかった。私がこの一族に来たのは、戦場で奴隷として働かせていたのを見つけ、数あつた奴隷の中でも私を選んだだけ。きつと見た目かなにかで選んだのかは知らないが、最初はきつと幸せな生活が送れるのだと、そう思っていた。

でも、そこにあつたのは空っぽな生活。私が望んだように望んでない、何も無い生活だった。

何もかもが空っぽ。私に向けられるその感情は、愛というよりも欲情に近かった。館の者達も、時が経つにつれ私の扱いが雑になつてくる日々。今だからこそ、当主の妻という立場があつてこそ今ここにいる。子を産めなくなれば、私は用無しの腐つた肉袋同然。

そんな私に出来るのは――。

「……あの娘の所に、行かなくちゃ」

我が子に、限られた時間で愛を注ぐこと。

私は人間だ。周りの吸血鬼と違い、寿命の桁が少ない。せいぜい生きて100年、大半はそれ以下。1000年以上も生きることの出来る妖怪である吸血鬼と人間である私とでは接せる時間はあまりにも少ない。

それは、人間と吸血鬼の混血種である娘、リリスも同じ。いくら人間の血を多く引いていようと、そこには吸血鬼の血が混じっている。半妖であろうとも、その寿命はこれらの妖怪と変わらない。私よりも何倍も生きれる。

だからこそ、私とリリスが接せる限られた時間で、愛情を注いであげなければならぬ。あの娘が愛を忘れないように。

椅子から立ち上がり、部屋のドアへと足を運び、廊下へと出る。

カツ、カツ――ということが静かな廊下に響き、私しかこの空間に存在しないこと

を実感させる。誰も居ない今ならば、あの娘の元へ行ける。

しばらくと同じ光景が続く廊下を歩けば、一つ、異様な光景が広がる扉を見つけた。そこには何重にも封印術がかけられており、決して開かないように外との干渉を禁じているようだった。

私はその扉の前へと歩き、その封印術に触れ、一つ一つ封印術を解除していく。そして異様な扉は普通のドアと変わることないものになった。

私とそのドアにそつと手をかけると――

「……だあれ？」

純粹無垢な可愛らしい声が聞こえた。

ごくん、と息を飲む。これまでにない緊張が私の身体を硬直させる。

――母親だ、と言ったらと失望するだろうか。

普通の子供なら、そうなるかもしれない。ろくにそばにいられないこんな母親など、母とは思っていないかもしれない。顔を見たくないかもしれない。

それでも、接しなければならぬ。限られた時間で、あの娘との思い出を作らなきやならない。あの娘が将来、この空っぽな世界で生きていけるように。

硬直した口を、私は動かした。その動かした力が、とても強く感じた。

「……私よ。リリース」

「……」

反応はない。

私が誰だかわからないのか、それとも会いたくないのか。

彼女の本心はわからない。でも、それでも、と私はその扉を開けた。

ギイ——

木のしなる音が響き、リリスの部屋へと足を踏み入れる。そこには何もなく、ベットのみが置かれた空間に、一人、小さくうずくまるようにかしこまっているリリスがいた。扉を開ける音を聞いたのか、リリスは少し顔を上げて私をじっと見た。けれど一分も経たずに顔を埋めてしまい、また振り出しに戻った。

「……私が誰だかわかる?」

「……」

私が誰かわかるか。

そう言うと、リリスはほんの少し顔を上げた。その隙間から見えるように、彼女は口を動かそうとしている。必死に言おうとしているのだろう。

私は待った。娘が、私と話そうとしている。どれほど長くなろうとも、待つべきだと私は思った。

そして——

「……お……お母さま……」

「うん、覚えてくれてたのね」

私が歩み寄ろうとすると、リリスはビクツと身体を跳ねてさらに縮まろうとする。私を恐れる姿が、私の罪の意識を強くさせる。

もつと早く接しておけば。夫の言葉など気にせずリリスと接しておけばこうはならなかった。今更ながら思う。

私とその足をリリスへと運ぶ度に、リリスの顔は恐怖で歪んでいく。私を恐れているその姿が、さらに私の心を蝕む。

そして、私とリリスの距離がゼロに等しくった頃――

「いや……あ……っ」

「……」

リリスは、完全に私を恐れて、身体を限界まで縮ませて涙を流していた。

――夫の仕業か。

きっと、まだリリスが幼いことをいい事に想像もしたくないほど酷いことをしたのだろう。よく見れば、顔や腕に酷いアザがあり、ぶたれた、という生易しいものではなかった。

放置していた私も、その原因の一つ。リリスが何もしていない私に対してこうも拒絶



的なのは、助けが来なかったからだ。もう誰も信用できない、みんな私を傷つける、と。

ああ、ごめんなさい。貴女をこんな風にしてしまった私は一生許されない。

でも――

「……もう、大丈夫よ」

「……え？」

貴女を、こうして癒すことは出来る。

貴女をこんな風にしてしまったのは、夫への恐怖でリリースへ何もしなかったからだ。

私が、早く動いていればこんな風にならなかった。

だから、これは贖罪だ。

私が、唯一彼女を癒せる存在にならなければならぬと思った。彼女が唯一頼れる存在であらなければならぬと思った。

一人の幼子、ましてや自分の子を拒絶的にした私は決して許されない。だからこそ、その子が安心して自分の道を行けるように、私が導かなければならない。

それが、私に課せられた使命だと、私は思った。

「……ごめんなさい。貴女を一人にしてしまつて」

「……あ……え……え？」

ギユツと、リリースの身体を包む。

リリスは状況が理解できないのか、身体の力は既になく、だらんと、私に身を任せていた。

確かに、いきなりハグだなんて、驚いて理解も出来ないだろう。けれど、私はこの娘に必要なのは、温もり——『愛』なのではないか、と、そう思った。

私も不器用なものだ。こうしてしなくても、言葉で伝えればいいのに、と我ながら思う。

でも、我が子の温もりが私に伝わってくる——この感覚は、この感覚だけは、他では味わうことのないものだった。

「貴女は私を恨んでいい。恨む権利がある。私が憎いなら、今、私を殺してもいい」

「ああ……ああ……」

でも——。

「…貴女がどれほど、これから先どうなろうと——」

「——私は貴女を、ずっと愛しているわ」

——口に出したその言葉は、嘘偽りもない本心。

たとえどれ程醜くなるうと、闇に堕ちようとも、愛すべき我が子には変わりない。

元凶となつた私が言うべきことでは無いかもしれない。でも、私はこの子の、唯一の、母親なのだ。

だからどれほど辛いことがあつても——この子を、愛せると確信できる。

「……あい……してる……?」

「ええ。心の底から」

先程まで無口で、脱力していたリリスが口を紡ぐ。

そして脱力していた腕は……私の身体を、ギョツと抱き始め、その力の強さは子供のものではあつたが、とても強く抱き締めているように感じた。

「……もう……たたいたりしない……?ひとりにはしない……?」

「もちろん。貴女が望む限り、私はそばに居るわ」

その声は震えている。

辛かつただらう。苦しかつただらう。私が想像を絶する苦痛を、彼女は受けてきたのだ。

独りの孤独。蝕まれる心。戦いの惨さ。

妖怪といえどまだ4歳の子供が知っていいことではない。それは成長を促すことなく、苦痛となるだけだ。

だからこそその苦痛を……誰かが、受け止めてあげなければならない。

「あ……ああ………あああ………つ」

「泣いていいのよ。泣き止むまで、こうしてあげるから」

静かに、幼子の叫びが響く。

幼子が受け止めていた苦痛を、母は笑って受け止めていた。

## 二話 子供なりの平和な世界

◆  
【サリー】

あれから、私は隙があればリリスの部屋にいるようになった。

とても理想的な再開、とは行かなかつたものの、リリスはあれから暗い顔は少なくな  
り、子供らしい年相応の行動をするようになった。

私が持ってきた人形に興味を持って、おままごとをしたり。

字が読めないリリスの代わりに私が音読すると、目を輝かせてその話を聞いたり。

私が最低限覚えていた芸程度の魔法を見て、飛び上がり興奮して私に聞いてきたり。

ようやく見せた娘の年相応の姿に、私は安堵した。

だが、それと同時に、不安もあつた。私は合間を縫ってリリスの部屋を訪れている。  
夫にリリスとの関係を悟られてしまわないよう、目を盗んでいるのだ。

それがバレれば、私は兎も角、リリスは無事では無いかも知れない。だから、できる  
だけ見られないよう、悟られないように部屋を訪れている。

いつまでもここに居たり、頻繁に出入りすれば関係を探られるかもしれない。故に、

そう長くはいられない。

『もう行っちゃおうの……?』

そして時間が来ると決まって、リリスは涙目でそう訴える。私の服を掴むその手は震えていて、『ひとりにはしないで』と訴えているようにしか見えなかった。

リリスはまだ幼い。そして、彼女の中の家族という心を許せる存在は、私だけなのだ。これでは、あまりにも狭い。このまま行けば他人との関係を断ち、私だけに執着してしまうかもしれない。そうしてしまえば、老衰にしろ病死にしろ、私が死んだ時にリリスは再び心を閉ざしてしまう。そうした時に支えることの出来る存在が、彼女には必要だ。

かと言って、その存在を作れるか、と言えば無理に近い。父がこの館の全てを握っている以上、リリスを嫌う父に心を委ねる同胞達はリリスのことを決して良く思わないだろう。『半端者』だの『劣等種』だの、不愉快極まりない言葉でリリスを傷つけるに違いない。

はて、どうしたものか――。

「どうしたの?お母さま、怖い顔してる……」

「!」

そう考え込んでいると、リリスは不安そうな顔で私の視界に入り込んできた。とても

心配と言える顔で、私はハツとして考えを打ち切る。

リリスに心の負担はあまり背負わせたくない。彼女なら、私が考える悩み事さえ一緒に抱えてしまいそうだ。

そう考えて、私はもう一度今へと意識を戻す。そこに、ハッキリとリリスの顔と部屋が映りこんだ来た。

「いえ、大丈夫よ。心配いらないわ」

「…うん」

不安そうな顔ではあったが、私がそう言うとりリスはいつもの顔に戻った。少しの間、沈黙が流れる。

すると、リリスは――

「…わたしね、へいわな世界が作りたいの」

「…え？」

と、突然、真剣な表情で言った。これまでになく、真剣に、言った。

あまりに唐突なその言葉に、私はつい驚いたような声を出してしまった。だが、リリスはそれでも構わず続ける。

「お父さまに戦いを見せられたとき…とつても、こわかったの。死んじゃった人達の声が聞こえて、こわくてこわくて、たまらなかつたの」

「……」

——恐れるな。と、酷なことは言えない。

歴戦の戦士や兵隊も、戦闘狂じやない限り戦争という類には嫌悪感と本能からくる恐怖が湧いてくるものだ。いつ誰が死ぬかもわからない、裏切りさえ起こりうる戦いは、群れを為しても信じられるのは己のみ。

そして、各々が持つ信念に貫かれた、罪のない命。幸福を受けるはずの子供も、それは例外ではない。

そうして無念に散っていった戦士の後悔と、幸せを奪われた只人の憎悪は血とともに大地に染み込む。いつまで経っても戦争跡地というのは、その光景を見せられているかのような雰囲気を出す。

それは、精神が成熟した大人でさえ、吐き気を催す事さえある。リリスは、それをわずか4歳にして目の当たりにしたのだ。

人の抱える、恐ろしい業というものを。

——どれだけ、苦しかったか。

——どれだけ、悲しかったか。

——どれだけ、痛かったか。

リリスに流れ込んだそれらは、この世のものとは思えないほど濁り、混ざり合い、嵐



のように渦巻きながらリリースに訴えていたに違いない。各々が抱えていた感情を。

それがどれほどの苦痛だったか——それは、想像を絶するだろう。

けれど、リリースはそれを見てもなお、真っ直ぐな瞳で——

「——でもね、お母さまに言われた時に思ったの。みんなが、あいし合えばいいって」

「！」

——皆が、愛し合えばいい。

確かに、皆が皆、世界を、己を、他人を愛せるのならば、戦争という醜いものは起きないだろう。それどころか、悪行さえ起こることはない。なにせ、それは愛するものを傷つける行為に等しいのだから。

だが、それは決して出来はしない。愛と憎しみは表裏一体であり、愛情深いものほど、憎しみに囚われやすくなる。愛で満たした世界に、一つでも悪行が起きれば憎しみが生まれ、癌のように世界を蝕んでいく。

古来から続く負の連鎖。これを断ち切る術など、無い。神話のように世界全てを破壊し、前提から再生させない限り。

この世界は、根本から間違っている。それを正さない限り、正当で平和な世界は訪れない。それほど、今現在に至るまでの負の連鎖が残した世界の傷跡は深い。

「……うん。お母さまの言いたいこと、わかるよ。でも、わたしはめざしたいの。『誰も傷

つくことがない理想の世界』を」

「……」

それでも、と。リリスは真剣な顔で語った。こんなにも幼い我が子が、真剣に。

——所詮夢だ。できるはずがない。

そう言ってしまうえば、それで終わりだ。そんなことは、神でもなければできないはずがない。人や、ましてや神とは程遠い吸血鬼ならば、尚更。

「……ふふ、随分と大きい夢ね」

「つ……や、やつぱり、おかしいかな……??」

「いいえ……」

けれど。

それ以上に、私はリリスがここまで立派な夢を持つていたことに、喜びを感じた。あんなに暗かった我が子が、世界を作りたい、と語る姿は、もう一人前の人間そのもの。

「それは、貴女以外では出来ないことよ」

だから、その夢を肯定しなくなつた。その成長を、祝いたかつた。

それに、そんなに真つ直ぐな瞳で語られたら、本当にそれが実現できるような感覚が

湧いてきた。この子なら、それができるのではないかと。

「充分、立派な夢よ。お母さんは、貴女の夢を応援するわ」

「……」

私がそう言うと、今まで見たことの無いような、ぱあ、と花が咲くような顔で、最高の笑顔で笑った。

よほど、嬉しかったんだろう。というより、初めてだったんだろう。

「そっか……そっか……っ！」

誰かに、認めて貰うことが。

自分の存在を、認めてもらえたこと。否定されていた自分がようやく、他人に認められたと。誰かに、褒められたと。

誰もが当たり前のことを、彼女は生まれて与えられてこなかった。だからこそ、自分の意味が認められたこの瞬間が、嬉しくてたまらないのだ。

—— ああ、どうして。

どうして、こんなにも純粋な子を誰も愛してくれない？ 罵倒を浴びせられ、隔離された部屋の中でこっそりとひとりぼっちで泣いて、皆が傷つかない理想の世界を夢見るとこまでも優しい我が子が、どうしてこんなにも虐げられ無ければならない？

これも、古くから続く連鎖の一つなのだろうか。その犠牲に、彼女は選ばれたという

のか。

「…お母さま？」

「なんでもないわ。さあ、絵本の続きでも読みましょうか」

「あ、うん！」

私は願う。この子がいつか、その夢の通りに世界を変えてくれることを。

私は願う。こんなにも優しい我が子が、世界に渦巻く狂気と業に押しつぶされないように。

そして、もう二度と、このような犠牲が、生まれないように。

## 三話 悪の否定

◆  
【リス】

——お母さまが私の元を訪れるようになって数年経った。

私は生まれてすぐに表の世界から存在を消された。吸血鬼の王族としてのあるべき象徴と力を持たず、そればかりか種族としての力さえ劣る私は、もはや一族の恥晒しにほかならなかつた。

誰一人、私を見ていない。私のことを思っていない。私を生ませたお父さまは、真つ先に私を見捨て、それに続くように一族の皆は私から目を背けた。

そして——忘れもしない、あの日の、光景。

私の目の前に地獄が出来上がっている。血肉がばらまかれて、死に絶えた骸が私の横に無残に沢山横たわっている。

幻聴かもしれない。だが、私は確かに聞いた。戦場に漂う人のエゴと、死んで行った人達の恐ろしい声を。

『イタイ』『クルシイ』『ドウシテ』『コロシテヤル』

私はあの日に知ってしまった。世界が背負う罪と、その世界に生きる者達の罪深さを。愚かしく、惨く、醜い生者達のエゴを。

知ってしまった以上、もう戻れることは出来ない。あんなものを見せつけられて、元の生活に戻る人など誰一人としていない。

争いや闘争には誇りや正義はない。大義名分なんてものはない。あるとはただ、戦争という名の殺し合い。

思い出すのは、1ヶ月ほど前。

お母さまは時々地下の大きな図書館から、絵本など様々な種類の本を持つてくる。私は実際に見たことがないからわからないけど、大図書館にある本は数十万冊を超え、それら全てがお父さまが各地の戦利品として勝ち取ったものらしく、中には幻とされた魔導書さえあるらしい。

たまにはあるが、お母さまは魔導書を持つてくることがある。お母さまは解説と手品を兼ねて、魔法を使ってくれることも。と言っても魔法の初級レベル程度のものであるが、見たことの無い私からすれば、それらは未知でいっぱい、どんなことが書いてあって、どんなことが出来るのか、ワクワクして仕方なかった。

だから私も、お母さまにお願いした。『私も、魔法を使いたい』と。

お母さまは快く承知してくれた。むしろ、魔法に興味を覚えてくれたことがとても嬉

しかったようで、お母さまはとても機嫌がよかったのを覚えている。お母さまは、元々魔法使いとしての素質があつたらしく、それなりの魔法は昔から使えたらしい。

お母さまは私に手取り足取り、丁寧に魔法を教えてくれた。悪戦苦闘はしたけれど、炎の魔法が使えた時はとても嬉しくて飛び跳ねたのを覚えている。

けれど、同時に思ってしまったのだ。いや、思い出してしまった。

——この力が、争いを生むのではないか？

曰く、魔法というのは時に時代をも動かす強力な力となるらしい。それは必ずとも良い方向になるとは限らず、強すぎた力は自滅を招いてしまうと言う。

魔法は人間の脅威であり武器。その力が一旦矛に回れば、魔法はただの破壊能力になるだけだと、お母さまは言っていた。時に、おとぎ話のように怪物さえ倒してしまうことさえ可能だとも言っていた。

ならば——





—  
あ・の・憎・い・お・父・さ・ま・も・  
殺・せ・る・の・で・は・な・い・か・？

何を考えた。

私は今、何を考えた。お父さまを、殺す？

不可能だ。お父さまは今現在において最強の吸血鬼であり、スカーレット家の王。吸血鬼社会を統べる帝王だ。そんな存在を、殺すなんて。出来るはずがないだろう。それもこんなちっぽけな魔法で。

否定しろ。否定しろ。その考えを否定しろ。

もう考えるな。その先を行けば、私はただの罪人になる。あの日のような地獄を自ら作り出してしまうことになる。

それだけは嫌だ。私は、ああは成りたくない。絶対に、なりたくない。もう憎しみな

んて抱きたくない。

抱きたくないのに、どうして、あんなことを考えたの？

——私もこの星に生まれた以上、呪われた運命からは逃れられないのか。結局、長い歴史の中の、過ちに過ぎないのか。

嫌だ、嫌だ。私は、私は、『誰も傷つくことの無い理想の世界』を作るんだ。そんな私がそれをしていいはずがない。そんな罪を犯してはならない。

お願いだから、嘯かないで。私の耳元で、嘯かないで。陥れないで。

私は、誰も傷つけたくない。誰も殺したくない。皆と、仲良くしたいだけなのに。どうして、収まらない。胸から込み上げてくる気持ち悪い感情が、収まらないの？

違う。違う。こんなのは、私じゃない。

私はこんなことを考えない。私はそんなこと思わない！お母さまに愛されている私が、そんなことを考えるなんてありえない！！

違う、違う！私は、そんなことは絶対にしない！！

違うの………違うの………！

そんなことしたら今度こそ、一人になってしまおう！

お願い、いい子でいるから。いい子になるから！！

私を見ないで！私を見つめないで！

——一人にしないで…置いていかないで…。

## 四話 潜むもの

◆  
【サリー】

この館では、娘であるリリスの存在は隠蔽されており、表向きでは存在していないことになっている。

リリスは、吸血鬼としてはあまりにも劣っている。ただの吸血鬼ならばそれだけで済んだかもしれないが、権力や実力を象徴とする我が家、スカーレット家は吸血鬼の中の吸血鬼。王族だ。そんな吸血鬼の象徴とも言える一族から一般以下の吸血鬼を産んだことが知れば、その名譽と権力は失落し地位を失うことになる。だから、夫はリリス誕生の後に、何事もないように存在を隠した。

おかげで外側の吸血鬼はリリスの存在を知ることにはなくなったが、ほかのスカーレット一族はリリスの事を罵り、蔑んで、唾を吐く。いずれリリスは心を閉ざし、部屋から一歩も動くことなく蹲るようになってしまった。

私がリリスの元に会いに行くようになって数年経つ。彼女はまだその年に見合う知識は持ち合わせてはいないものの、私には心を開いて接してくれるようになった。

できるだけリリースを楽しませてあげようと、私は地下にある大図書館から絵本だけではなく、たまに魔導書を持ってきて魔法を披露してあげたりする。その度にリリースは目を輝かせて、もっと見せて、と年相応の姿で私にお願いしてくるのだ。

ある日、私が魔道書を持ってきて新たらしい魔法の手品を見せてあげようとした時、リリースは、少し真剣な顔で私に言った。

『私にも魔法を使わせて、お母さま』

魔法に興味を持ったのか、リリースは魔法を使いたいと言い出した。私は特に咎めることも無く、リリースに教えることにした。

正直、嬉しかった。リリースが私以外のことに興味を持ち始めてくれたことが嬉しくてたまらない。それが得意分野である魔法ならば尚更である。同時に、この子も成長しているんだな、と実感した日でもあった。

教えたのは初級中の初級。炎の魔法を教えてあげた。手取り足取り、と言った感じではあったが、リリース本人にも魔法の才能があるのか、そこまで教え込むことは無かった。そして、自身の掌にボワツと炎が吹き出して、リリースは驚きつつも目を輝かせて、それをまじまじと見た。リリースが魔法を覚えたことは親としても嬉しかった。

だが、その次の瞬間だった。



リリスの嬉しそうな顔はフツと消えて——嗤った。

口角を上げて、声も出さずに、嗤ったのだ。それは喜びの表情とはにて異なるものであった。まるで、新しい玩具を手に入れた子供のそれのようで……どこか、狂気に充ちた狂笑のそれだった。

この子は何を考えているのか、その時だけ分からなかった。いつもは手に取るようにわかるのに、この時だけ、何も考えられなくなつた。

今までのリリスとは考えられない程の深い狂気に、私は困惑するだけだった。

一体、何が起きている。あの子に一体、何が——

「あ、あう？あ〜！」



「!」

あの日の出来事で頭がいっぱいになっていた私は、赤ん坊の声で意識を戻された。腕の中の赤ん坊は私に向かって手を伸ばして、声を上げている。

父に似た青い髪の色に、吸血鬼特有の白い肌と、蝙蝠の翼。私の元に生まれた、もう一人の命。

「ふふ、ごめんなさいね、レミリア」

「あうあー!」

レミリア・スカーレット。

スカーレット家の第一子。魔力の質ともに吸血鬼として最高値の完璧な子供。表では、そういうことになっている。

私から見れば、どんなに優れていようがこの子も私の子供に違いない。吸血鬼であっても、愛すべき我が子であるのには違いない。

リリスがこの子のことを知ったら、どんな反応をするだろうか。反応は目に見えてはいるが、彼女と会わせるのがとても楽しみだ。

「……私は人間。この子達は吸血鬼、か」

「あゝ? うー!」

——どんなに優れていようが、とは言ったが。

レミリアもまた、リリスと同じように人間と吸血鬼の血を持つ妖怪。半分であれ妖怪の血が流れている以上、人である私とは寿命の桁が違う。結局、私は彼女たちを置いていってしまうことになる。

そうなってしまうたら、リリスを守る人が誰一人としていなくなってしまう。リリスの傍で味方であり続ける人が、いなくなってしまう。そうしたら、彼女はまた心を閉ざしてしまふ。初めて会った時以上に。

そうなってしまったら——魔法を教えたあの日の狂気が、彼女を狂わせてしまうかもしれない。

私は窓の席を立ち、レミリアを抱えて机に座つて、一つの本を取り出した。

——俗に言う、日記と言う奴である。

置いていってしまうのならば、せめて何かを残しておかなければならない。きっと、私は母親としての使命を全う出来ずに死んでしまうだろうから。

だからこうして、今思う感情や考えを書き写すことで、姉妹に残したい。この日記を手がかりに、我が子を導いてあげられるように。

「…お姉ちゃんのこと、よろしくね」

「あう！あう！」

まだ時間の猶予はあるが、私は人間。吸血鬼からすれば脆い存在だ。いつ死んでしま  
うか分からない。もし死んでしまった時、リリスのそばにいてあげられるのは、レミリ  
アだけだ。

いつかその日が来た時……レミリアがこれを読んで、リリスの事を理解した時。きつ  
と導いてくれることを信じる。

未来予知が出来る訳では無いが、不思議と確信がもてる。我が子だからか、信じるこ  
とが出来る。この子ならそれが出来ると、不思議とそう思ってしまう。今はまだ、幼い  
けれど。きっと立派になるに決まっている。

——だって、我が子だもの。子を信じずして何が母親か。

私はレミリアをあやししながら、筆を取って日記を書き始めた。